

夏目漱石の作品の中の建築の研究

—舞台空間の推移からみた作品の類型について—

THE ARCHITECTURAL STUDY ON THE LITERARY WORKS
OF SOUSEKI NATSUME

Classifying his works according to the change of stage-space

若山 滋*, 張 奕文**, 渡辺孝一***

Shigeru WAKAYAMA, Yiwen ZHANG and Kouichi WATANABE

In the present paper, we studied the architectural space in the literary works of Souseki NATSUME who is expected as a representative writer of modern Japan. All wordings related to the urban and architecture were extracted from 12 of his works and the space of stage was specifically analyzed. We found that extremely various architectural wordings were appeared in his works, which indicates sort of "compound aspects" of cultural situation in Japan in that time. According to the distinction in the change of stage-space in his works written in different time, his works could be classified into four patterns. In his earlier works (until "Sanshirou", 1908) the change of stage-space was "active" and "extensive", whereas in his latter works (since "Sorekara", 1909) it was "uneasy" and "circulated".

Keywords: literature, architectural wording, stage-space, Souseki NATSUME

文学, 建築用語, 舞台空間, 夏目漱石

1 研究の目的

夏目漱石(本名夏目金之助、以後漱石と略称する)が近代日本を代表する文学者であることは論を待たない。『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』などにまったく触れずに過ごす日本人はほとんどないと言われるほど幅広い層の読者を獲得し、特にその長編小説は既に日本人の精神の一部ともなっている。本論はその漱石の作品に登場する建築空間について研究する。

文学作品の中に登場する建築や都市について研究することの意義については、既発表論文^{注1)}で述べているが、ここで特に漱石作品を対象とする意義を整理すれば、既に大量に積み上げられている漱石文学の研究の一部になるという直接的な意義と、そこから明治あるいは近代という時代の、日本人の心象における建築空間を探るという間接的な意義が認められる。漱石文学は国文学に限らず多様な分野から研究されており、その作家の精神及びその作品に登場する人物の精神は近代日本人の精神の一つの典型を示すものとして、普遍的な対象とされている。

作品をその建築空間の面から分析することにも意義があるものと思われる。また漱石のみによって近代文学あるいは明治時代のそれについて総括できるという意味ではないが、漱石という鋭敏な感性と巧みな表現者の一連の作品は、少なくともその一部として、もしくはその指針としてとらえることが可能なテキストの一つであろう。そこにはもちろん日本人(明治人)の、伝統と西洋と近代の建築文化に関する感覚を探ることも含まれる。作家漱石が立たされていた時代はまさにこれらの文化様式が三つ巴の葛藤を続けた時代であって、作品の中にはその三つの文化様式にかかわる精神が発見されるはずで、これは建築学研究にとっても重要な意味をもつと思われる。

本論は、そういった考察の基礎となる、漱石作品の中の建築空間の具体的な様相を明らかにすることを目的とする。まずその長編小説に登場する建築用語とその進行の舞台空間を客観的なデータとして抽出分析し、建築空間の視点から漱石の長編小説の全体的傾向と類型を探り

* 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

** 名古屋工業大学社会開発工学科 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, M. Eng.

*** 鹿島建設 工修

Kajima Design, M. Eng.

出そうとする。

漱石が大学予備門において建築を志そうとしたことはよく知られている^{注2)}。きわめて曖昧な理由によってこれを断念したわけだが、文学者になってからも漱石が美術や建築に興味をもっていたことは作品の中にも現れており、ゴシックやアールヌーボーといった建築様式を表す用語がたびたび使われているのも建築学的な興味をひく部分である。しかも漱石は、若年の頃より漢学に親しみ、長じては英文学を志し、また留学経験もあるところから、和、漢、洋にわたる広い教養に通じ、この時代の日本に交錯した様々な文化様式を、誰よりも広く鋭く深く論じうる作家であったと言っている。実際、建築も含めた芸術様式一般を幅広く比較的に論ずる寸評的な文化文明批評はその作品の随所に登場する^{注3)}。またその感受性の鋭敏さは、普通の生活人としてはやや度を越していると思われるほどであるが、その鋭敏な感受性を通して表れる、文明批評、人間精神の分析は、普通の人間には読みとれないようなすかな歪みにも反応するダイヤルゲージのようなもので、われわれはこの近代日本人の意識を形成した時代に、建築空間的心象に関する精巧な測定器を得たことを感謝すべきであると思われる。

2 既往の関連研究

作家漱石、及びその作品に関する研究は枚挙にいとまなく、その概要を述べることは、問題を作品の中の建築空間に限定する本論の主旨にそぐわないが、代表的かつ総合的な漱石研究者として小宮豊隆と江藤淳の名をあげておく。小宮豊隆は森田草平らとともに直接の門下にあった研究者として、戦前の漱石研究の代表的な地位を占めていた。自ら漱石研究をライフワークとしている江藤は、小宮豊隆の『夏目漱石』^{注8)}を「漱石評伝の決定版」と認めた上で、これを批判するかたちで評論を展開し、戦後の新しい漱石像を形成する代表的な評家となった。その後の評論は江藤を軸とし、特に漱石の女性関係に関する江藤の推論を批判した代表としては大岡昇平をあげたい。

これらは主として漱石の作品と作家の精神の関係を論ずるもので、特に小宮らの「則天去私」論と、江藤の漱石の「兄嫁登世」論が焦点となっている。本論のように空間的な面から漱石を総合的に研究したものは意外に見あたらないが、断片的には、ある特定の作品を具体的な都市空間と結びつけて論じたものが、篠田浩一郎^{注4)}や石崎等^{注5)}などの著書の中に存在する。また英国留学中の漱石を論じたものは、考えようによってはその都市や建築の空間性、様式性と漱石の精神との関係に光を当てたものともとれる。この点に関しては東秀紀のユニークな試み^{注6)}がある。国文学を離れた他の分野からの漱石研究には、精神分析学からのものが多く、また漱石の絵

画論や芸術観を取り上げたものもある。

また文学とその背景となる都市との関係を論じたものとして、前田愛の『都市空間の中の文学』^{注15)}があり、これは記号学的な見地からテキストを都市空間との関係において読み直すという点で、先に述べた篠田や石崎らの研究とともに従来の国文学的な研究とは一線を画するものとなっている。古典文学の中に現れる建築については、建築の分野で、木村徳国^{注7)}、池浩三^{注8)}、小野恭平などがあげられ、また筆者らはこれまで日本古代文学に登場する建築と都市にかかわる用語を抽出することを中心に、文学をできるだけデータ化する方針によって研究を続けている^{注9)}。

3 研究の方針

国文学の分野で都市や建築を問題とする場合、多くは実際の都市空間や有名建築との照合が主たる論点となる。また建築学の分野でも、より詳細に建築空間との照合を行うものが多いが、本研究では、作品の中の建築や都市を現実の空間とは切り離れたそれ自身の世界として扱う。むしろその方が文学という、いわば現実から遊離した虚構の世界を取り上げる意義にあっていると思われるからで、文学的「意味」を構成する一つのまとまりとしてのテキスト内部の関係において、またいくつかのテキスト相互の関係において、建築空間の「意味」を析出させようとする^{注10)}。文学の空間はある個人によって書かれた虚構の世界であるが、そこに浮かび上がる空間の「意味」は、その時代その社会における、もしくはある文化の系における共通感覚に支えられており、それによってこそわれわれは文学を「ある意味」として受け取るのであり、また逆に文学から、空間的共通感覚を探り出すことも可能なのだと思われる。

対象とする作品は、漱石の代表的長編小説として、表1にかかげた12作品である^{注11)}。直接の資料としては、岩波書店の漱石文学全集^{注1)}を用いる^{注12)}。

表1 研究対象作品

作品名	発表年	主要舞台
吾輩は猫である	明治38年	東京（主人の家）
坊っちゃん	明治39年	四国の田舎（松山）
草枕	明治39年	那古井の温泉湯
虞美人草	明治40年	東京、京都
三四郎	明治41年	東京
それから	明治42年	東京
門	明治43年	東京、山寺
彼岸過迄	明治45年	東京
行人	大正元年	東京、大阪、和歌山、和歌の浦
こころ	大正3年	東京、私の故郷
道草	大正4年	東京
明暗	大正5年	東京、療養先の温泉場

4 建築用語の抽出

研究方法として、まず都市や建築に関する用語をすべて抽出する。これは本研究をひとまずこれまでの国文学研究あるいは建築史研究の積み重ねからくる既成概念から切り離し、いわゆる「文学的読み」からではなく、テキストを、ごく単純な文字の集積として見ることから出発しようとする立場による。建築用語（今後都市や家具に関する用語もまとめて建築用語と表現する）は、建物、部屋、部位、建具・部材、家具、都市施設、地名、国名、交通機関、その他に分類して集計する。

建物 建物の一棟あるいは複数の棟を表す。
「家」「学校」「下宿」など、ただし「学校」などは空間としてではなく、組織、機関としての意味もあり、その場合には「機関」として別に扱っている。

部屋 建物のうちの一つの空間単位、「座敷」「書斎」「廊下」「縁側」など。

部位 建築を構成する位置の概念をともなった物質的な部分、「屋根」「壁」「門」「床の間」など。

建具・部材 部屋を仕切るための、あるいは建築を構成する部品の部分。

家具 家具、調度類、「机」「椅子」「布団」「電灯」など。

庭 庭およびその構成物、「庭」「井戸」「垣根」など。

都市施設 都市空間を形成する公共的な空間、「道」「橋」「停車場」など。

地名 市町村、都市、地域の具体的な地名。

国名 国を表す固有名。

交通機関 乗り物を表す。「電車」「車」など。

その他 建築空間、生活空間を表す上記に含まれない用語。「外」「イルミネーション」「ヌーボー」など。

5 建築用語についての考察

漱石全作品^{註13)}から抽出される建築用語はきわめて多様である。これは漱石自身の建築的語彙の豊富さを示すものであるが、この時代は急速な都市化の時代であり、従来の日本建築の伝統的語彙に、文明開化以後の西洋建

表2 頻度の高い建築用語

作品名	建物	回数	機関	部屋	回数	部位	回数	建具・部材	回数	家具	回数	庭	回数	都市施設	回数	地名	回数	国名	回数	交通機関	回数	その他	回数
全作品	家	709	89	室	404	門	232	障子	189	机	216	庭	191	往来	93	東京	385	日本	133	電車	229	二階	136
	住宅	377	98	座敷	316	窓	146	戸	112	床	108	垣	50	路	84	京都	146	西洋	106	汽車	155	町	113
	学校	317	192	玄関	241	入口	96	襖	101	椅子	106	池	33	停車場	70	大阪	59	外国	49	車	145	国	111
	下宿	175	34	部屋	202	床(とこ)	62	畳	99	火鉢	97	垣根	28	通り	65	鎌倉	50	国	44	俵	53	田舎	95
	病院	111	20	書斎	202	壁	58	格子	65	鏡	94	生垣	15	道	54	新橋	35	朝鮮	29	船	51	奥	73
	宿	106	20	茶の間	144	軒	49	柱	62	電話	81	井戸	14	橋	54	本郷	30	英国	24	舟	34	外	66
	うち	87	16	廊下	139	床の間	43	敷居	36	洋燈	81	竹垣	14	停留所	45	上野	27	満州	23	自動車	18	表	60
	大学	81	62	縁側	137	舞台	42	硝子戸	32	電燈	62	石垣	13	坂	35	横町	25	露西亞	21	馬車	18	温泉	58
吾輩は猫である	学校	63	26	書斎	59	床(とこ)	18	障子	40	鏡	39	垣	29	浴場	4	東京	17	日本	16	汽車	5	国	29
	家	62	1	縁側	35	窓	16	畳	19	布団	27	庭	21	橋	4	静岡	14	希臘	13	船	5	裏	21
	うち	40	9	座敷	33	流し	9	襖	15	戸棚	13	垣根	13	動物園	4	吉原	12	西洋	13	電車	4	町	19
坊っちゃん	学校	58	58	部屋	21	門	11	障子	8	鏡	19	庭	9	停車場	8	東京	34	日本	4	汽車	14	温泉	25
	下宿	39	9	座敷	17	窓	5	戸	4	床	10	井戸	3	船場	1	延岡	8	露西亞	4	車	8	町	23
	うち	27	1	教場	15	舞台	5	黒板	3	湯壺	6	四つ目	2	運動場	1	越後	5	支那	1	船	4	田舎	17
草枕	家	18	1	部屋	17	入口	13	障子	19	鏡	9	庭	11	路	14	那古井	10	日本	17	汽車	11	村	11
	観海寺	9	4	廊下	13	門	8	襖	14	机	8	池	10	道	7	東京	10	日本	11	舟	8	田舎	8
	庫裏	7	0	風呂場	10	石段	8	畳	7	戸棚	7	石壁	3	岨道	5	ウエニス	9	西洋	11	電車	5	会	6
虞美人草	家	58	14	部屋	41	接	19	障子	30	机	43	庭	21	橋	17	京都	58	西洋	19	車	28	博覧会	21
	鳥屋	11	2	座敷	23	門	14	畳	17	椅子	31	池	12	往来	13	東京	33	日本	15	汽車	16	伊豆	15
	住居	10	8	書斎	21	床(とこ)	14	戸	10	洋卓	22	植込	7	停車場	12	叡山	25	外国	15	電車	15	二階	11
三四郎	家	66	1	座敷	26	窓	30	機	24	机	17	池	33	路	13	東京	41	日本	26	汽車	30	国	23
	学校	34	7	部屋	24	門	25	障子	6	椅子	16	庭	22	坂	13	熊本	23	西洋	21	電車	25	奥	17
	大学	33	26	玄関	24	入口	17	畳	6	床	13	生垣	5	通り	10	大久保	11	外国	5	車	11	表	16
それから	家	86	6	座敷	38	門	21	戸	13	椅子	26	庭	33	橋	7	東京	22	日本	25	電車	37	外	18
	住宅	49	2	縁側	32	入口	9	格子	11	洋卓	16	垣	4	通り	6	青山	13	西洋	8	車	29	表	16
	学校	25	14	玄関	31	壁	9	敷居	8	洋燈	14	垣根	2	小路	4	神楽坂	9	英国	5	汽車	9	奥	16
門	家	93	0	座敷	47	門	29	障子	34	屏風	33	庭	11	路	9	東京	56	満州	14	電車	22	外	25
	役所	28	6	室	36	床の間	11	戸	16	火鉢	31	垣	4	通り	6	京都	24	蒙古	7	汽車	8	奥	23
	宅	27	0	茶の間	34	軒	9	襖	13	洋燈	20	杉垣	4	通	3	広島	12	日本	3	船	7	町	18
彼岸過迄	家	77	18	室	37	門	43	障子	14	電話	29	庭	9	停留所	31	鎌倉	32	西洋	14	電車	58	二階	30
	下宿	29	11	玄関	28	窓	14	柱	9	机	22	木立	4	通り	24	東京	22	日本	11	車	27	三階	10
	学校	21	17	座敷	20	梯子段	8	硝子	7	傘入	11	電気公園	2	往来	18	内幸町	19	露西亞	6	船	22	横町	9
行人	家	64	10	室	116	窓	29	柱	13	蚊帳	22	庭	17	停車場	12	大阪	53	外国	4	汽車	24	二階	20
	住宅	56	30	座敷	36	梯子段	14	屏	8	電話	14	石垣	8	往来	11	東京	45	日本	2	俵	22	三階	16
	宿	35	8	書斎	27	門	12	障子	6	火鉢	14	中庭	5	道	9	和歌山	19	仏蘭西	2	電車	11	町	7
こころ	家	66	31	室	69	床(とこ)	9	襖	21	机	21	庭	11	往来	7	東京	64	日本	4	汽車	8	国	25
	住宅	61	33	座敷	20	門	8	格子	8	火鉢	11	垣	3	坂	6	雑司が谷	11	中国	1	電車	7	田舎	13
	学校	30	28	玄関	17	窓	4	障子	5	行李	9	境内	2	墓地	5	鎌倉	7	外国	1	俵	2	市	13
道草	家	67	19	書斎	29	門	18	畳	14	机	20	庭	9	往来	18	東京	14	外国	16	船	4	田舎	13
	住宅	47	4	座敷	28	天井	5	襖	6	床	13	池	7	道	8	駒込	4	日本	7	汽車	3	町	11
	実家	11	11	玄関	16	床の間	5	格子	5	洋燈	12	石垣	3	通り	6	門司	3	西洋	5	車	2	里	6
明暗	家	82	11	室	70	梯子段	31	戸	26	電話	35	庭	17	往来	21	京都	36	朝鮮	21	電車	36	二階	31
	宅	58	3	玄関	45	門	23	障子	16	机	23	垣根	4	小路	12	東京	21	西洋	10	車	27	温泉	14
	病院	56	6	廊下	27	入口	12	硝子戸	14	電燈	20	噴水	3	橋	9	栃木	3	日本	8	軽便	14	町	7

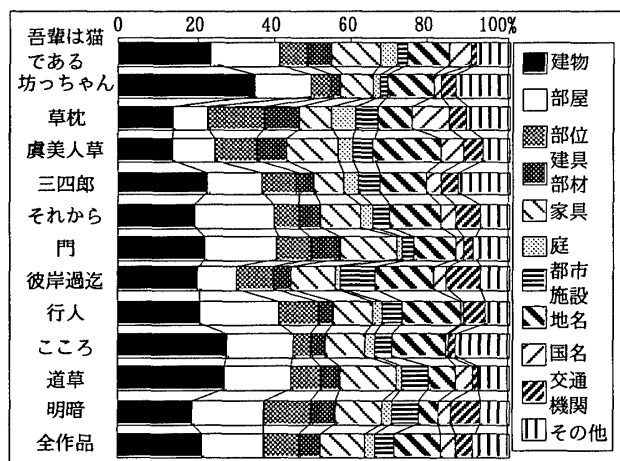


図1 建築用語の分類別構成比

築様式、あるいは既に取り入れられつつあった近代的建築様式¹⁴⁾にかかわる語彙が加わって、建築的都市的語彙の豊富な時代であったという評価もなりたつように思う。ここですべての建築用語の表を掲載することは紙面の関係で不可能であるが、各用語の分類における頻度の高い用語だけを作品別に掲載しておく(表2、図1)。

全作品を通じて、「家」が圧倒的に多いが、これは日本文学に共通することで、散文、少なくとも小説、物語のジャンルでは、時代を通じてこの「家」がもっとも出現頻度の高い建築用語である。建物の分類では「宅」の多いのが注目されるが、漱石はこれを「家」と同様の意味で用いており、単に「家」の言い換えと考えていいであろう。続いて「学校」「下宿」が多いところは、漱石の小説の特徴で、その舞台の社会的な偏りを現してもいる。こういったところに漱石の作品の私小説に近い特徴が現れているとも言えよう。

家具の分類では、「机」「椅子」「洋卓」「ランプ」「洋燈」「電灯」など、西洋風近代的な生活スタイルを表現する用語が目立つ。露伴や一葉や鴎外と比較して、漱石の作品は、当時としては、西洋風の色の濃い空間の中にあったようだ¹⁵⁾。

また「鏡」の頻度が高いのが特徴的であり、これは「庭」の分類に「池」が多いことともに、漱石作品とその作家の精神を読み解く一つの鍵であると思われる。この点については、文学や精神医学などの分野でも論じられているが、このような統計的なデータを示す分析はこれまでになかった。

「地名」では圧倒的に「東京」の頻度が高く、漱石作品の舞台が日本各地を取り入れながらも東京を主として展開されていたことを示し、また「新橋」に続いて「本郷」「上野」が多く、中でもとりわけこの地域への偏りを示している。「国名」において「日本」に匹敵するほどに「西洋」が多く、注目すべき事実であろう。漱石作

品の随所に、いわゆる文明批評が登場することはよく指摘されるところであるが、その際日本と西洋の比較は、登場人物の会話などにおける典型的な話題の型となっており、この時代いかに西洋が意識されたか(それは今まで続く日本人の話題の典型でもあるが)を示している。また「交通機関」「その他」の分類では、「電車」「汽車」「車」などに加えて「博覧会」が多いのに文明開化の時代性を感じさせる。

作品を比較してそれほど大きな変化は見られないのであるが、注目すべきは、やはり「吾輩は猫である」で、「部屋」「部位」「家具」などの分類において他作品と異なる、猫の目を借りた描写からくる細密さが現れている。

6 舞台空間の分析

次に作品の中で叙述される内容の舞台空間を分析する。これは一つ一つの用語ではなく、文章全体を対象に、その作品を演劇化した場合にその叙述部分がどのような舞台になるかを考えながら、その所属すべき空間を決定していくもので、作品の空間的な流れと構成を探ることができる。しかしながら小説というものは戯曲とは違って必ずしもその舞台がはっきりしない叙述があり、この作業にはある程度の読み込みと判断が必要である。また漱石は、回想や空想あるいは手紙の内容を長く叙述することが多く、この場合には一応「回想」という舞台を設定した上でさらにその中身の叙述の舞台を分析することとした。

本研究では、舞台空間の推移を量的に把握するために、作品の中のすべての文章を、いずれかの空間に当てはめ、その舞台空間において記述されている文章量(文字数)を作品における「意識時間」ととらえて定量化している。集計の単位は、前記「建築用語」における「建物」のレベルを基本舞台空間とし、文章量(文字量)を横軸にとって舞台推移図としてグラフ化する。さらにそ

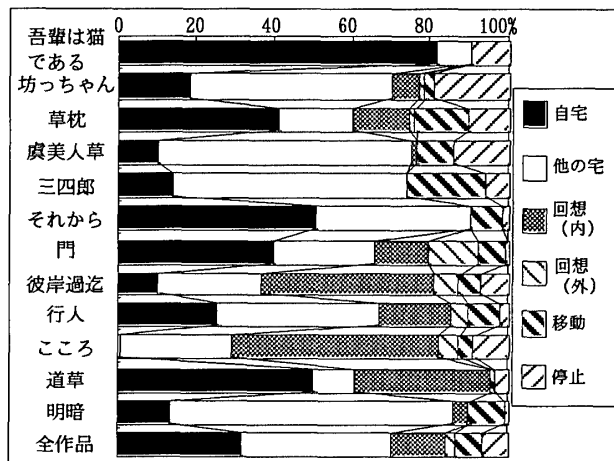


図2 全作品分類別舞台時間構成比

の集計を舞台時間構成比とする。また将来のより細かい分析を考慮して、[部屋]のレベルまで分割集計しておく。

7 舞台空間の推移についての考察

文章量を意識時間として横軸にとり、各作品の舞台の大まかな分類による時間構成比を図2に示し、各作品の舞台推移図(図3~14)を作成し、分析を行う。

主人公の「自宅」について、漱石の作品は必ずしも舞台回しの立場にある人物がそのまま主人公とは言えず、

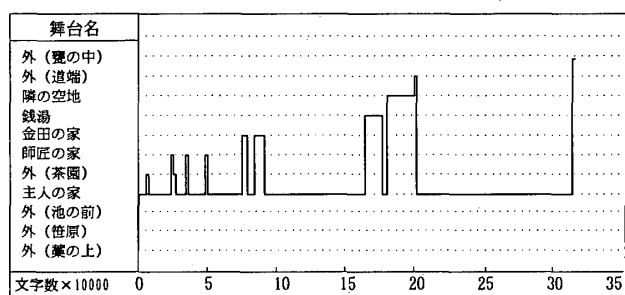


図3 『吾輩は猫である』舞台推移図

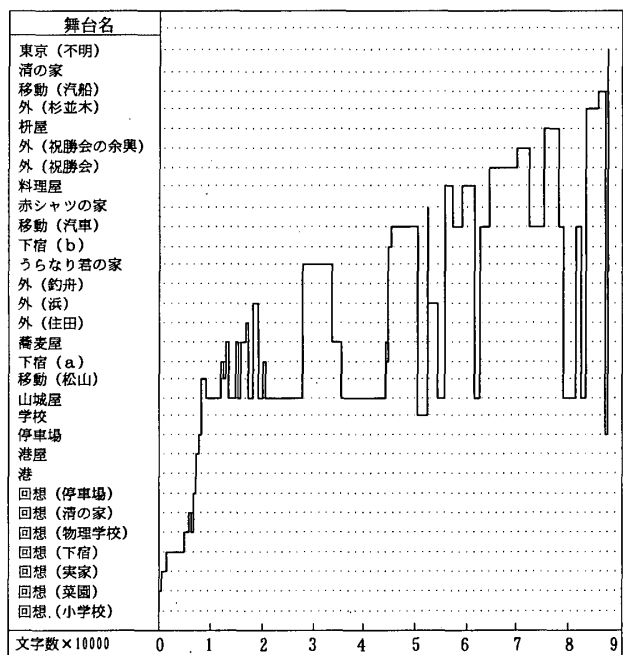


図4 『坊っちゃん』舞台推移図

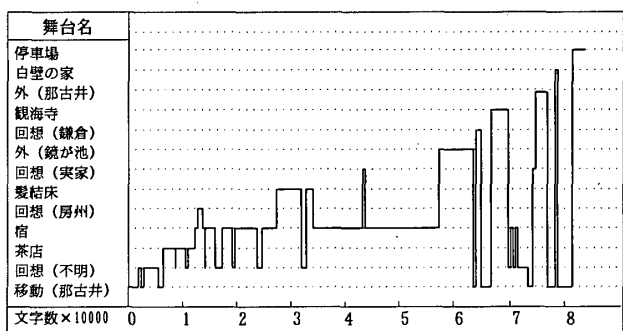


図5 『草枕』舞台推移図

主人公が多人数にわたると思われるものも多いのであるが、作品の主人公論は本論の主旨ではないので、ここでは単純に話者、観察者の立場にある人物の家を「自宅」と設定する。各作品の「自宅」は次の通りである。

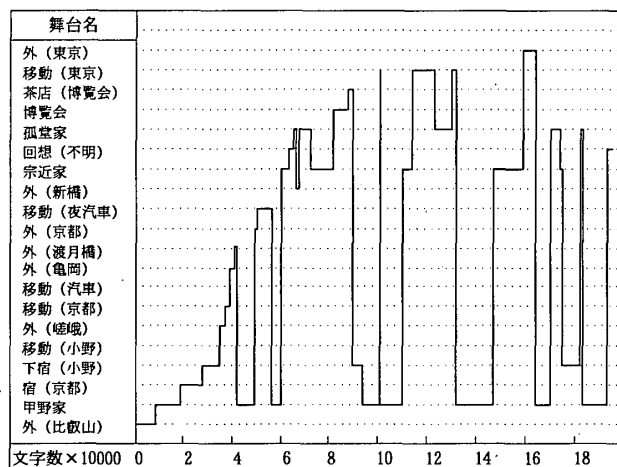


図6 『虞美人草』舞台推移図

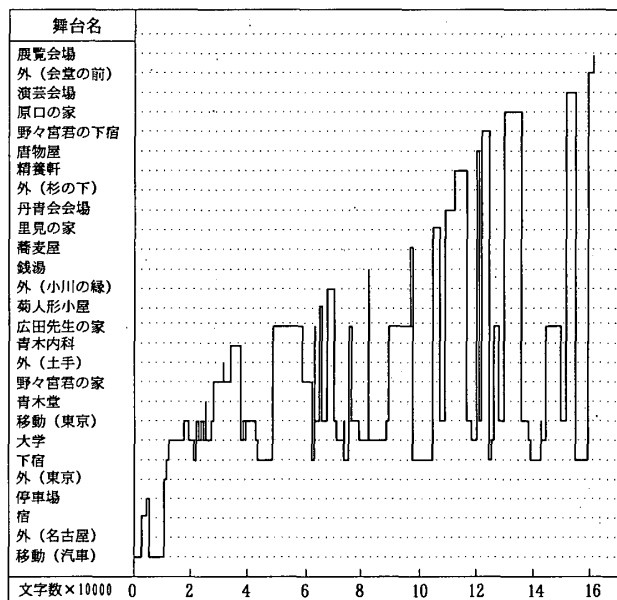


図7 『三四郎』舞台推移図

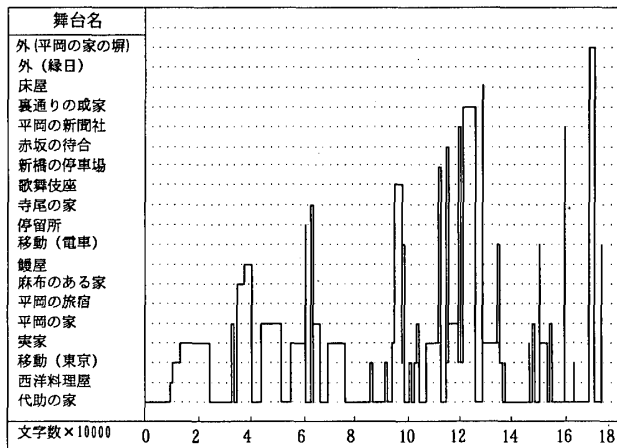


図8 『それから』舞台推移図

「吾輩は猫である」主人の家
 「坊っちゃん」下宿（aとb）
 「草枕」宿
 「虞美人草」小野さんの下宿
 「三四郎」三四郎の下宿
 「それから」代助の家
 「門」宗助の家
 「彼岸過迄」敬太郎の下宿
 「行人」二郎の実家と下宿
 「こころ」「私」の下宿
 「道草」健三の宅
 「明暗」津田の宅

まず、舞台時間構成比において、一見して言えることは、「自宅」時間の長いものと短いものがあるということで、いくつかの「回想」の長い作品をのぞいて、「自宅」の短いものはその分「他の宅」すなわち他人の家が長い傾向がある。回想の長い作品とは、「彼岸過迄」「こころ」「道草」などで、このことはこれらの作品の決定的な特徴となるとともに漱石作品の特質の一つを表している。

舞台時間構成比とともに各作品の舞台推移図を見比べてみると、もっとも特異な舞台空間を示すものが、「吾輩は猫である」であり、次に「草枕」であろう。この二つは、全体に舞台移動性の高い漱石作品の中で、比較的舞台の動かない作品であり、建物単位で舞台空間を見ることが「吾輩は猫である」は「主人の家」、「草枕」は

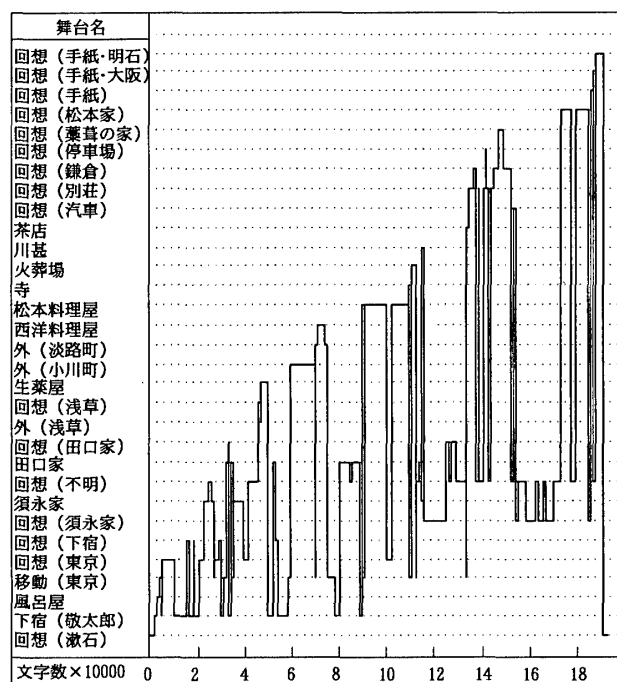


図10 『彼岸過迄』舞台推移図

「宿」に固定的である。これを舞台空間の推移から見た第1の類型とする。次に類似性が見られるのが、「坊っちゃん」「虞美人草」「三四郎」の三作品で、舞台空間がよく移り変わり、結果として「他の宅」にいる時間が長くなっている。構成としては、年齢の若い主人公が様々な人物の家（建物、空間）をめくり歩きながらス

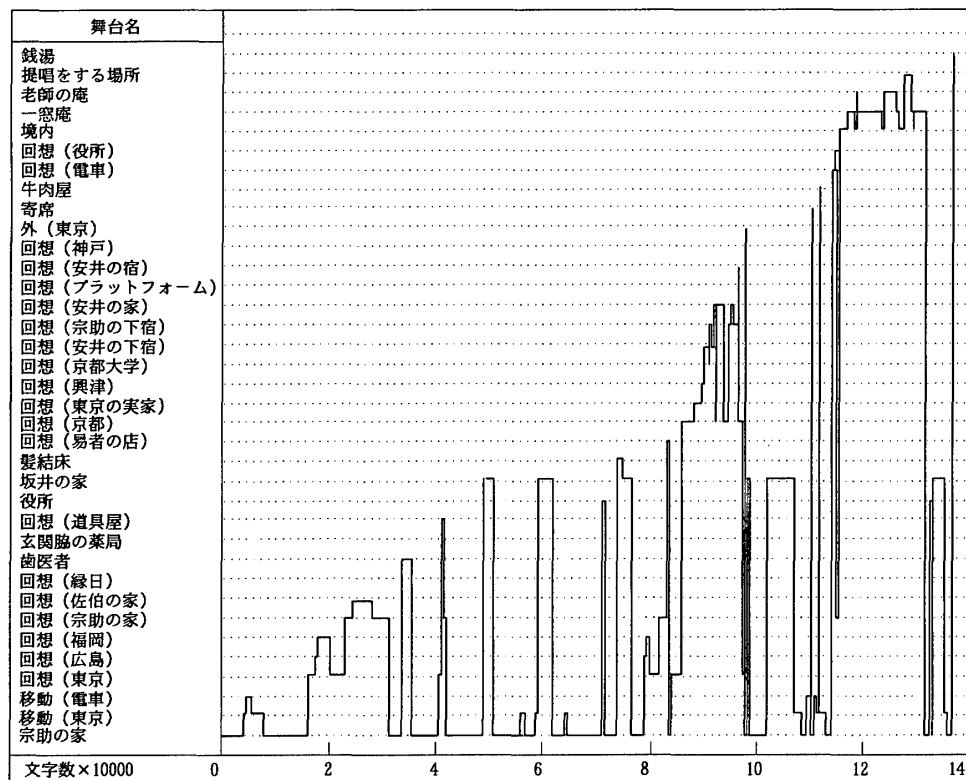


図9 『門』舞台推移図

トーリーが展開する仕組みになっており、これを第2の類型とする。これに對極的な位置にあるのが「それから」「門」

「道草」で、これらは自宅が舞台となっている時間が比較的長い。主人公はそこにじっとしているわけではなく、自宅を拠点としてあちこちを訪問するのであるが、それによって大きく舞台が転換するのではなく、舞台も、また主人公の意識も、必ず「自宅」に戻ってくる。これを第3の類型とする。残された四作品「彼岸過迄」「行人」「こころ」「明暗」は、舞台がきわめて短期的に転換するが、ストーリー

にさほど大きな影響を与えず、主人公は彷徨的に移動している。未完となった『明暗』は別として、「回想」の部分が長いのが特徴となっており、舞台空間よりもむしろこの「回想」が物語の展開を推進している。これが第4の類型となる。

8 舞台空間の移動性

漱石作品の主人公は「よく歩き回る」ということはしばしば指摘されるところであるが、その作品の舞台もまたよく移動している^{註16)}。第1の類型においては、「建物」を単位として見るかぎり、移動性は比較的抑えられているように見える。これはその主人公が猫という小動物であることから、その行動が他作品の主人公のように都市の中を歩き回るといふより、家の内部あるいはその周辺をうろつく程度であること、もしくは初めから旅先の「宿」が主舞台となっていることによ

るのであろう。標題にも現れているように、猫と草枕（旅）という視座において既に、ある種の「異界」が設定されている。この類型において、舞台空間は建物のレベルでは固定的とはいえ、その視座は決して静的なものではなく、浮動的であり漂泊的である。

第2の類型では、主人公が若いのが特徴でよく歩き回っている。その移動性がそのまま舞台転換となり、ストーリーの展開につながっているという点で、肯定的で活性のある移動性である。その舞台空間の移動性の中で、地方の町に文明開化の波が遅れながらもひたひたと押し寄せる様子や、京都と東京の古色と新奇の対比の様子や、近代学問の府としての帝大を中心として東京の山の手が刻一刻と変貌する様子を描出している。その過剰な移動性は、ややもすれば作家の精神における「躁」状態を表現しているように思える。

第3の類型では、「家」「宅」など主人公の自宅が舞

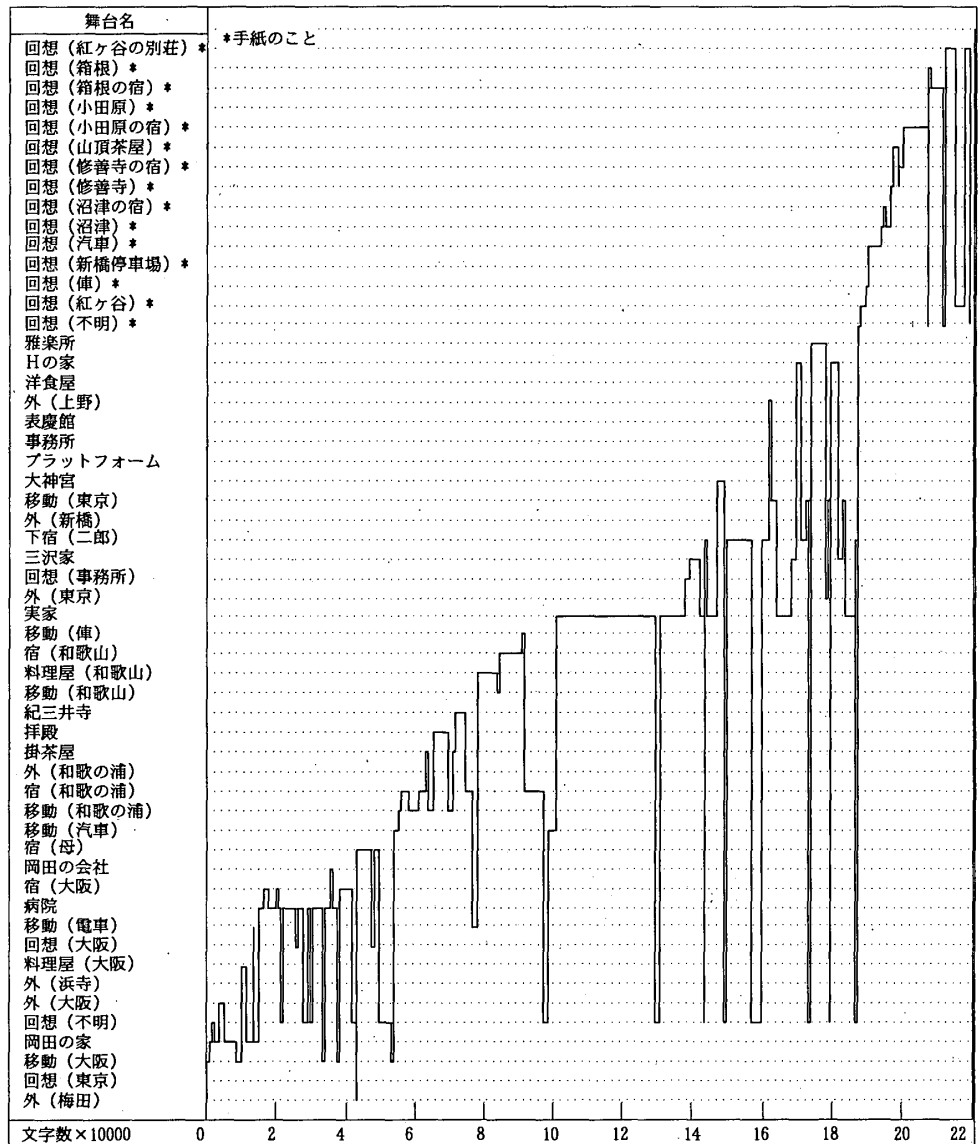


図11 『行人』舞台推移図

台展開の拠点となっているのだが、決して静的ではなく、主人公はたびたびその拠点を出て動き回る。しかしその移動性は、ストーリー展開や、文明と伝統に揺れる都市の表情をとらえるためというよりも、むしろ主人公の心の「堂々巡り」を反映している。その移動性は展開的ではなく、循環的であり、主人公の行き場のない不安を表現し、精神の「鬱」状態を示しているようにも見える。

第4の類型においては、移動性の頻度は今まで以上に激しい「神経質」なものとなる。それは物語の語り口にある程度の役割を果たすものの、決してストーリーを活性化し舞台を大きく転換させるものではなく、そこに主人公の、回帰するあてのない彷徨、精神的な不安が現れている。

総じて、前期の作品である第1、第2の類型において、その舞台空間の移動性は、作品の物語の転機とな

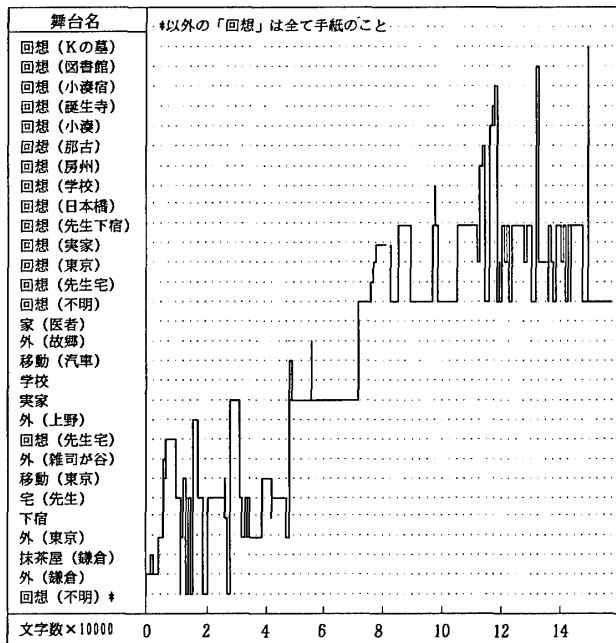


図12 『心』舞台推移図

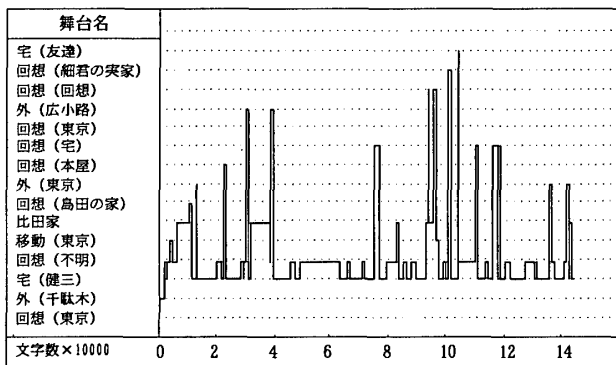


図13 『道草』舞台推移図

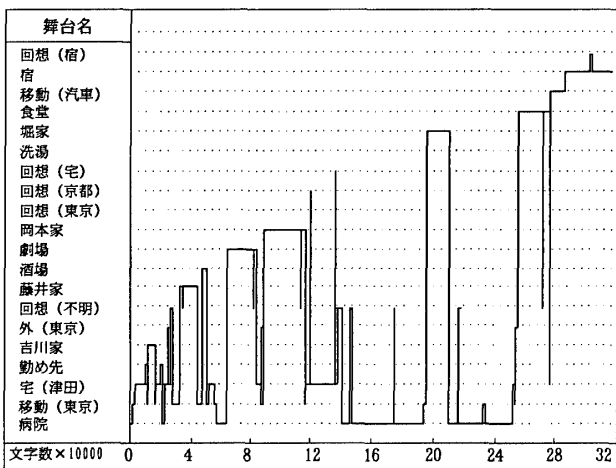


図14 『明暗』舞台推移図

り、文章の端々に見られる文明批判の刺激剤となっているが、後期の作品である第3、第4の類型においては、主人公あるいは作者自身の精神的不安と苦悩を表現しているように思える。

9 結論

漱石作品の中に登場する建築用語はきわめて多様であり、作家漱石のこの方面の語彙の豊富さを感じさせる。特に家具などに現れる西洋的な内部空間の様相は、漱石作品の特徴の一つと言っていい。このことは、建築家を志したこともあり、漢学にも親しみ英国留学経験もあるという漱石の、建築に対する該博な知識と関心の高さを示し、またそれを作品の中に巧みに散りばめることによって、新しい知識に対する読者の好奇心を満たす趣向を凝らしていることをも示している。同時にそれは、伝統的な建築様式に加えて西洋建築様式さらには近代的な新しい様式が入り込んでくるという、建築様式のみならず、この時代の日本の複相化した文化状況を示すものでもあろう。

作品の舞台となる建築空間の推移を分析すると、作品全体に、その主人公がよく動き回るという特徴が現れる。特に「東京を歩く」という点において、当時の東京は今とは違って、ほぼ歩いて回れるひとまとまりの圏域を形成していたことがうかがえる。また交通機関の空間が多く現れることも漱石作品の特徴であるが、漱石の小説は、その都市内及び都市間の空間移動の中で、物語を展開し、主人公の思考と作家の批評を触発し回転させる、一種の「都市逍遥小説」と言うべき側面をもっている。

舞台となる建築空間の進行形態から作品は四つの類型に分けられ、それぞれの類型の舞台空間上の特徴をまとめると表3のようになる。

通常、漱石の作品は初期、中期、後期と分けられるのであるが、舞台空間の視点からはむしろ、第1、第2の類型つまり「三四郎」までと第3、第4の類型つまり「それから」以後とで二分したほうが明瞭である。これはよく言われる中期の三部作の連続性を途中で切るようであるが、「三四郎」と「それから」との間の作品の質の変化については、多くの評家の指摘するところでもあ

表3 舞台空間による類型の特徴

類型	作品	特徴
1	吾輩は猫である 草枕	舞台は建物レベルでは固定的だが、作品の構成は浮動的漂白的。もともと小動物の目、あるいは旅の宿という非日常的な世界が設定されている。
2	坊っちゃん 虞美人草 三四郎	「他の宅」が多く、舞台がよく動く。活発で発展的。舞台転換がストーリー転換と重なっている。西洋風空間が登場する。精神的「躁」状態を感じさせる。
3	それから 道草*	自宅が舞台となる場合が多く、そこを拠点として動き回るが、発展的ではなく、循環的で、堂々巡り。精神的「鬱」状態を感じさせる。
4	彼岸過迄 行人** こころ 明暗***	舞台の移動頻度が高く、一所にじっとしていない。ストーリー展開に無関係に動き回ることもあり、精神的な不安定を感じさせる。『明暗』を除いて「回想」が長い。

*は第4の類型にも近く、**は逆に第3の類型にも近い。***は未完でもあるところから別格にしたほうがいいかもしれない。

る^{注17)}。あえて端的な表現をすれば、前半の舞台空間移動性は「活発」で「展開」的であるが、後半の移動性は「不安」で「循環」的である。これはそのままその時期の漱石の精神状態を表現するというわけではないが、何らかの関連性は指摘しうるであろう。今後、漱石の長編小説の建築空間の分析は、この類型を念頭に置いて進めることができると思われる。

・注・

- 1) 参考文献2～7を参照。
- 2) その理由として漱石は、自分もともと変人であることを認め、建築家ならその変人であることをやめなくてもよく、「建築ならば衣食住の一つで世の中になくて叶はぬのみか、同時に立派な美術である。趣味があると共に必要なものである。で、私はいよいよそれにしようと思った。ところが丁度その時分(高等学校)の同級生に、米山保三郎という友人がいた。・・・その時かれは日本でどんなに腕を揮ったって、セント・ポールの大寺院のやふな建築を天下後世に残すことは出来ないぢやないかと何か何とか言って、盛んな大議論を吐いた。そしてそれよりもまだ文学の方が生命があると言った。・・・さふ言はれて見ると成程又そうでもあると、其晩即席に自説を撤回して、又文学者になる事に一決した。」(談話筆記『処女作追懐談』より、小宮豊隆『夏目漱石』所収。参考文献7を参照。)
- 3) 江藤淳はこれについて「彼は、作家でもあった文明批評家として残る」と表現している。参考文献10を参照。
- 4) 篠田浩一郎、「都市小説としての『坊っちゃん』」参考文献12所収。
- 5) 「『吾輩は猫である』のトボス」参考文献13、この中には「ちゃぶ台のメタファー」という一文も収められている。
- 6) 同時代にロンドンを訪れた者として漱石と都市計画家であるエベネザー・ハワードを並列的に述べたところに特徴があり、特に両者を結びつける動機は薄弱ではあるものの、近代都市ロンドンに対する嫌悪ともいべき共通感覚をてこにして、組み合わせの妙を発揮している。参考文献14を参照。
- 7) 木村徳国は『古事記』『日本書記』『万葉集』の中の建築用語を研究したもので建築学会に発表したものをまとめて出版している。参考文献16を参照。
- 8) 池浩三は『源氏物語』の中の住まいを研究したものを出版している。参考文献17を参照。
- 9) 参考文献2～5を参照。
- 10) 漱石という一人の作家の複数の作品を扱うのは、『万葉集』や『古今集』のような完結したテキストとは異なり、そのテキストとしてのまとまりが問題になるのは当然であるが、漱石は日本近代文学において傑出した存在であり、特にその長編小説群はその内容に強い相互関連が指摘され、現代の大江健三郎や村上春樹と同様、漱石ワールドとも言えるべき独特の「世界」を樹立している。読者もこれらの小説を「漱石自身の心的世界」として読む傾向にあり、われわれはこれを一つのテキスト(言語によって織り上げられた一つのまとまり)として設定することも可能であると考ええる。もちろんここで一つ一つの作品性を無視しようというのではない。われわれはあくまで一つ一つの作品を独立したテキストとして考察するのであるが、上記のような理由から、いくつかのテキストをシリーズとして考察し、さらにそこから作家漱石の建築観といったものにたどり着くことも、研究のスコープに入れておきたい。
- 11) もちろん漱石の作品で重要なものは他にも多い。特に漱石の作家としての精神を解く手がかりとしては、初期の『浮城物語』に収められた短編や『夢十夜』などの重要性が指摘されているが、本研究はそ

の代表的長編小説において漱石を研究するものであり、まずこの12作品をもって一応の研究対象とすることは可能であろう。

- 12) 同じく岩波書店の『漱石全集』(1984-1985)を底本としている。
- 13) 以後漱石「全作品」という言葉で、ここで研究対象とした12作品を指す。
- 14) 例えば「ヌーボー式」などの用語が、漱石の新しい建築様式への興味を物語っている。
- 15) 筆者らは既に古典文学だけではなく、近代文学についても多くの作家の作品を分析している。ここに比較すべきデータを提示することはできないが、そういった研究から読みとれる結果を漱石作品の特徴として述べることは許されよう。
- 16) 他の近代文学と客観的に比較することは難しいが、例えば近代小説の嚆矢とされる二葉亭四迷の『浮雲』や戦後小説の典型としての阿部公房の『砂の女』などは、「建物」のレベルでは舞台がきわめて固定的である。
- 17) 江藤淳も吉本隆明もこの点を指摘している。

・参考文献・

- 1) 夏目漱石：漱石文学全集・『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『草枕』『虞美人草』『三四郎』『それから』『彼岸過迄』『門』『行人』『こころ』『道草』『明暗』、岩波書店、1990.11.19
- 2) 若山滋ほか1名：『万葉集』における建築空間、日本建築学会計画系論報告集、No.388、pp.116-123、1988.6
- 3) 若山滋ほか1名：『古今和歌集』と『新古今和歌集』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.405、pp.141-147、1989.11
- 4) 若山滋：『源氏物語』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.408、pp.93-99、1990.2
- 5) 若山滋：『枕草子』における建築空間、日本建築学会計画系論文報告集、No.411、pp.89-95、1990.5
- 6) 若山滋：文学の中の都市と建築、丸善ライブラリー、1991.4.20
- 7) 若山滋：「家」と「やど」・建築からの文化論、朝日新聞社、1995.5.5
- 8) 小宮豊隆：夏目漱石、岩波書店、1938.7.1
- 9) 江藤 淳：漱石とその時代、新潮社、1970.8.20
- 10) 江藤 淳：決定版夏目漱石・漱石の深淵、新潮社、1979.7.25
- 11) 江藤 淳：漱石論集、新潮社、1992.4.17
- 12) 篠田浩一郎：都市の記号論、青土社、1986.6.20
- 13) 石崎 等：漱石の方法、有精堂、1989.7.10
- 14) 東 秀紀：漱石の倫敦・ハワードのロンドン、中央公論、1991.9.15
- 15) 前田 愛：都市空間の中の文学、筑摩書房、1982.12.10
- 16) 木村徳国：上代語にもとづく日本建築史の研究、中央公論美術出版、1988.2.25
- 17) 池 浩三：源氏物語—その住まいの世界、中央公論美術出版、1989
- 18) 柄谷行人：漱石論集成、第三文明社
- 19) 森田草平：漱石の文学、東西出版社
- 20) 大岡昇平：小説家夏目漱石、筑摩書房、1988.5.20
- 21) 平川祐弘：夏目漱石—非西洋の苦闘、新潮社
- 22) 深江 浩：漱石と日本の近代、桜風社
- 23) 宮井一郎：夏目漱石の恋、筑摩書房
- 24) 吉田六郎：漱石文学の心理的探求、勁草書房
- 25) 土居健郎：漱石文学における「甘え」の研究、角川書店、1972.9.30
- 26) 稲垣瑞穂：夏目漱石と倫敦留学、吾妻書房
- 27) 吉本隆明、佐藤泰正：漱石の主題、春秋社
- 28) 蓮見重彦：夏目漱石論、青土社、1987.5.20
- 29) 多木浩二：生きられた家—経験と象徴—、青土社、1984.3.10
- 30) 夏目漱石：美術批評、講談社、1980.1.15

(1994年12月10日原稿受理、1995年7月13日採用決定)